

二つがやりの巻

解脱の巻

如來……………	一	念佛三昧……………	二二
ミダの活現なる釈迦佛陀……………	六	是心是佛是心作佛……………	二三
永遠の生命の意義……………	一一	六大……………	二五
涅槃界……………	一二	三性……………	二七
歡喜光……………	一四	自然界に啓示せられたる靈智態……………	二八
苦と悪……………	一六	佛性衆生心地……………	二九
如來の恩寵によつて解脱……………	一七	天佛と人佛……………	三〇
投合せし人の心情……………	一九		

如來

凡そ宗教にては此宇宙は偉大なる神の力に産出せられ、また終局目的には神に歸依し、永遠の生命と常住の平和とに入るの眞理を教ふ。神とは大乘佛教には如來即ちアミダと名づく。如來は一體にして三身あり、法身報身應身是なり。

法身、宇宙の實體萬物は是によつて生産されまた擔保せらる。法身とは即ち天則秩序を統一の理體なり。視よ大にして天體の無數の星宿が各一定したる軌道を循環し、其秩序の整しき千萬年を通じて亙つことなし。地上の萬物動植物の類悉く秩序の整齊せること、之が秩序の統一の根底なかるべからず。即ち是は法身の體と名づく。法身は無始無終本然の自性即ち是れ絶對心靈態なり。法身に全知全能の徳川あり。萬物に秩序の整ふるは全知の作用なり。如來は天則に秩序に世界萬物を産出し擔保するのみにあらず、終局目的には一切衆生を常恒不變の眞理の靈界に攝取する權能を有

— 2 —

す。即ち是を報身と名づく。報身、眞善美眞理の靈界に嚴臨して、規律に従つて衆生を攝取救靈す。唯一の眞理とは即ち之れ眞の神梵語にいふアミダ、絶對に限量なき光の義なり。此眞理の光りに依つて清めらるものは永恒の生命に入る。アミダ佛陀は永恒の生命なればなり。眞理によつてきよめらるべきに多くの義を有す。

聖き源なる絶對の聖き神は至眞なり至善至美である。之に對する人の精神の三分類即ち知と意志と感情である。人の知力は宗教的知力は天然の無明といふて眞理にくだるのである。宗教的神靈に對する知力は未だ開發せざるが故に無明と申すのである。眞理の教により修養により神の至眞の光に依りて心靈開展して、眞知の顯現したる時がこれ人の知力がきよめられて聖くなりしといふなり。

已に聖められたる人は、宇宙の眞理の光明の裡にありて自己返照とて日々三たび我身を省りみ、眞理の標準に隨つて、三業の行爲に於て迷はないのである。靈界と靈界とは美天國また極樂涅槃界或は常寂光土等種々の名を以て表明せらる。靈界は金銀マニ寶石等を以て莊嚴せられ、光明長へに輝きつゝ、平和と自由とに充されたる處。報身如來は最と麗はしき相好を備へ威嚴ことに巍く萬徳豊富に具へ給ふ。

如來の智慧の光は遍く一切處に照し亘りて至心に信念する時は信心開發す。如來は神聖正義の徳を以て光臨す。神聖に對する觀念には、自律的に道徳を制裁し、正義には私心を犠牲にし、如來の正義に奉順し、恩寵の聖名ナムアミダ佛を稱へて、至心に聖旨の現はれを祈り、若しくは冥想觀念に神を凝す時は、信心開發し自己の惡質は解脱し、心靈更生し平和と歡喜との幸福なる生活を遂げ、此身の終には正しく報土に生れ大涅槃を得る。

法身は天然自性無始無終
宇宙全體即ち如來の身心なれば之を物心不二の大日とも名づく。

— 3 —

法身は一切の體に在せども内容豊富の性徳を具す故に如來藏性と云ふ。一切智一切能



の兩徳ありて萬物を産出するに秩序あるを知と云ひ一切の活動せしむるを能と云ふ。一切衆生は大日の一分なれば小大日小造化なり一切の小大日は大日のため

なれば常寂光土または蓮華藏界亦是極樂世界亦是涅槃界と名づく。

報身は衆生が法身から受たる靈性を靈育して佛と爲らして給はる靈格である。報身は(盧舍那)光明徧照の身とす。是心靈界の太陽なので、例へば世界に太陽の力なかりせば萬物生存できぬ如く、報身佛の光明によらざれば、衆生は聖き靈的生命は生存できぬ。

如來は光明永へに輝く常樂世界に在し念佛の衆生を攝取めて他受法樂を與へ給ふ正覺の光明普く十方を照して衆生を覺らしむ故に無量光と名づけ、如來は衆生と共に常住不變の故に無量壽と云ふ。如來は一切衆生を攝取し靈徳無量なれども十二の光明を以て萬徳を表す。

報身如來は光明永しへに十方世界を照し、之に觸る者は必ず成佛せざるなし。然れ

ども衆生は心の開深くして之を知るに由なし。爰に應身佛を分出して迷界の衆生を教へて報身の光明に攝めしむ。

應身、報身から分出して現世界の衆生に相應せる人の身を以て、衆生を教化し給ふ教祖釋尊である。佛陀が此地上に出で給ふや、中天竺かびらの淨飯王を父とし摩耶夫人を母とし幼名をシタルタと呼び、生れつき叡智迅に五明四吠陀に精通し伎藝として習ふに成せざるなし。然るに老病死の相を見て世の無常を悟り國と位とを捨て、山に入りて道を學す。

ミダの活現なる釋迦佛陀

日は已に西に没し地は一面に昏くなりぬれど山の端に皎々たる満月は地上を照しぬ我等心眼なくして如來無量光を知見すること能はざれども此世界に出でたる大聖釋迦佛陀の徳光の赫々たるを見てミダの實在を信す。吾人は信す

ミダは宇宙靈界に輝く太陽此土の教主釋迦佛陀は是ミダの人格活現なることを。無量壽經の序分に此意義を示し給へり。釋迦佛陀ミダ三昧に入り給へば佛陀の心中ミダと合一し入我々入釋迦の身心によりてミダの靈光を現せり。文に曰く爾時世尊諸根悅豫し姿色清淨にして光顔巍巍たりと。此佛陀の表情に無限の神秘的要素を含藏せり。其内容には宗教意識の眞髓を圓滿に含藏せるものと信す。

其深意ある聖旨を承けたる弟子のアナンの言に於ていよゝ其消息を洩されたり。即ち、曰く
今日世尊諸根悅豫し姿色清淨にして光顔巍巍たること明淨の鏡の影表裏に暢るが如し。威容顯曜にして超絶し給へること無量なる未だ曾て殊妙なること今の如くなるを見奉らざりきと。釋尊聖容の表情斯のごとく殊妙なるは釋尊の心の鏡にミダの慈智の靈光映現し入我々入釋尊の精神即ち法身無量光の實現なり。ミダ現の釋尊なれば内面に充滿せる靈光即ち聖容に現れたものである。

然れども外面に現れた表情のみにては其内容無邊の靈徳を含蓄することを示し難し
 こゝに於てミダ不思議の靈徳の光は釋迦の全精神に顯現することをアナンの言を以て
 語らしめ給へり。ミダの靈徳の光がいかに釋尊の聖意に實現せるかを對照して示さば
 『今日世尊奇特の法に住し』

ミダの清淨光が釋尊の六根に現はれ身心ともに清らかに佛眼乃至佛身意清淨なるこ
 とと心鏡の表裏に暢れり。

『今日世雄諸佛の所住に住し』

ミダ歡喜光と融合せる釋尊の感情入我々入大我の中に安住し自受大法樂を受く。

『今日世眼導師の行に住し』

ミダの智慧光の顯現したる釋尊出世の本意衆生をして佛知見を開示し佛の正道に悟
 入せしむ。

『今日世英最勝の道に住し』

釋尊の聖意即ち自らミダ無上の最大至善の道徳殿に安住し、

『今日天尊如來の徳を行し給ふ』

如來の徳たる一切衆生をして自己と同じく無上道に攝せん爲に常恒度生の活動を現
 す。

斯の如きの現相は人佛釋尊の身によりてミダの靈光現なることを尙かさねて明され
 たり。

『去來現の佛 佛と佛と相念じ給ふ。今の佛も諸佛を念じ給ふことなきことを得んや
 何が故ぞ威神の光々たる乃ち爾るや』と。

佛々相念とは人佛の釋迦と法身無量光との融合、日光が月に顯るゝの謂である。ま
 た諸佛とて即ちミダは三世一切諸佛を總合せの體なれば無量尊といふ。今釋迦佛陀
 が無量尊を念じ釋迦の明鏡心にミダの靈光活現したるなり。

佛陀言はく、アナンよ汝の言はるゝやうに實に然り法身無量光は無盡の大悲を以て

三界を憐み、故に今人佛釋迦として此世に出でミダの光を宣べ傳へて群萌を拯はんと
 欲し、恵むに眞實の利を以てす。實に此眞理を聞くことを得るは容易なる幸にあらす
 すべての人民の心を開きて光化せんとす。アナンよ能く聞かれよ。ミダの活現たるこ
 の佛陀正覺の智は本無量光の顯現なれば實に無限の泉より出る。而してよく世を導く
 こと極りない。いかなるものも此眞理の光のみは退絶することは不能である。アナン
 よ人佛釋迦は常に團食のみにて活くるものでない。ミダの甘露の靈餐を以て靈なる命
 を住せしむるのであるから無量永劫決して靈なる身根心は衰ふるものでない。永へに
 悅豫し姿色は清く麗はしく光顔は常に變ることはない。それは佛陀は常に三昧によりて
 ミダと合一の智慧と相應すればなり。喩へばよく磨ける金剛石はよく日光を反射する
 ごとくに金剛なる定と慧とはミダの靈光を映射するの徳を有するものである。

然らばミダの靈光はいかにして受くべきぞこれを受くるは定と慧とである。定は三
 昧に入つて心水湛然としてミダの靈光をとめ、慧は深く彌陀の秘藏を開きて自己に
 現はす。佛陀は定と慧とによつてミダと相應しまたミダを活現したまへり。

此の文に示せる教祖の聖意はすべてミダを信念する衆生の爲に範を示し給へるなり
 故に吾はミダの光明によりて永遠の救を求むるものは宜しく教祖の芳躅を謂ふて自己
 の身心は是ミダの靈光を容るゝ器として常に信念をすまれんことを希ふ。

永遠の生命の意義

佛教の去行の歸する所の永遠の生命とは佛教解脱の要求する所なり。生死を解脱し
 たる永恒常樂の涅槃を證得するを目的とす。

涅槃とは生死を超越したる永遠生命の常住平和の處、即ち絶對界また無始無終の神
 の國なり。小乗教の涅槃は眞空眞如の現はれにて、消極の方。大乘教の涅槃は常住安
 樂自在清淨の四徳を以て莊嚴せる無上の光榮と無比の靈福の光明輝く處とす。

涅槃界

大乘教に示し給ふ釋尊は其の本永遠光明のミオヤに在す。ミオヤが我等衆生を御許に攝取せん爲めの御出現なれども闇の衆生に隨順して人生の無常生死の苦は免れ難い其生死の苦の源は人々具して居る罪惡の元たる煩惱である。此煩惱の闇を除き生死の闇より出で、永遠常樂の光明に入るにあらざれば眞に永遠の平和と安寧は得がたし。唯自己のみにあらず一切衆生と共に永恒の安寧を得るにあらざれば満足せず。此の要求を満さん爲に王位も捨つること弊履の如く人間の榮耀を犠牲にして山に入つて道を學びける結果無始無明の生死の源と罪惡の源とを亡し廓然として正覺を成じ彌陀大光明即ち涅槃（永生）の常樂世界に入ることを得たまふた。

佛の教の目的は一切と共に常住の平和なる涅槃界に入る所であり。涅槃とは永恒の生命常住の平和なる安樂自在清淨なる無比の光榮と無上の靈福の光明とこしへに輝くところ超然たるミオヤの光明の中にしてすべての功德の現はれる世界のことである。此のミオヤの光明の中の生活に入るのが佛教の要求する所、永恒常住の所なればこれを無量壽國ともいふ。

世尊は斯く入山學道の結果、彌陀大光明即ち涅槃常住の世界を發見したまひ、御身は娑婆に在りながらも御心は彌陀の光明中常住安樂自在清淨の淨土に栖みあそびたまふた。精神がミオヤの光明中に入るにあらざれば眞の永劫の生命と常住の平和は得られぬことを悟りたまひて已降はすすべての人々に教へて此のミオヤの光明に入るべきに引導したまふた。されば我等は教祖のみ教に隨ひてミオヤの光明中に入つて無量壽の靈福を得べき道を要求し、又ミオヤの聖意は我等衆生を大悲光明の中に攝めて聖意に稱ふ子として永遠の常樂に安住せしめんとのみむねなることを信す。されば我等は光明の中に人と爲り聖意を己が意として最善の努力を期し而して命終の時正しくミオヤの御許に詣つるものと信じ之を吾人の要求とす。

歡喜光

感情を解脱し融合し眞我の中に安立し靈福を感ぜしむる光。宗教生活の中心點。自己に最も深密なる本體の心體に集中して如來を自己のものとす。宗教機能は心理活動中最も眞隨なる感情にあり。

智力的實在は如來を全く我がものとするに非ず。正しく恩寵が心情に親炙し自己の血肉と恩寵による精神生命として宗教生活す。溫暖と熱中との心情により新鮮なる活氣と之より生じ己が罪惡を悔ひ苦悶に耐へずして投歸没入し甚深の悲壯に身を犠牲にし奉事する如きは悉く感情なり。宗教生活最も甚深なる深密にして活動の原動中心は悉く感情なり。感情信仰に消極方面。宗教は解脱を要す。感情的信仰に解脱すべき性能は苦惱と罪惡。之を苦諦集諦と云ふ。人の天性は顛倒の幸福主義にして苦不淨不自由無常なり。自己の天性に對して主我幸福主義なり。世界は我に目的を達せしむる恩寵なるものと思ふて特む幸福は甚だ獲がたし。身を快美の器と思ひ世は幸福を興ふるものとし、己が心意は常規なるものとし、天則を我が自由なるものと思ふ豈圖らんや。若し食色を快美の器とせば身を害し命を失す。世に享受する處は八苦競ひて幸福の目的を阻害す。感情なるものは縁に隨ひて轉じ己に順ずれば貪り逆へば憤怒、嫉忌、憍慢、憎惡等、喜怒哀樂、風に隨ひて動搖し常規あるなし。自由ありと思ふもの一もなし。見よ己は天然に規定せられ、身の大小及び性質の如何等すべて自然に規定せられ因果に約束せられて自由なるものに非ず。然るを顛倒して自ら主我幸福を主義とす。哀れむべし。三苦は生物世界を通じて逼め苦しめ、八苦人間を惱ます。三苦とは苦々、壞苦、行苦にて、八苦とは生、老、病、死、愛別離、怨憎會、五陰盛、求不得、是なり。

宗教の解脱の動機は苦を感知するにあり。教祖佛陀老病死を觀て世の非常を悟り自己及び一切衆生を此の天則より生死の關門を如何に脱せんとの意識より解脱の道を求

佛敎修道の階級四聖諦は初めに苦を知り集を断じ道を修し滅を證す。即ち苦諦に苦を知りし後に集諦即ち罪過解脱の要を感ず。宗教意識發達したる後に罪過感情起る。罪過感情は義務道德即ち神の聖意と自己の我意行爲との齟齬するより生じ來る。罪過感情は善を欲し神意に協合せんと欲するより起る。善を實現せんとすると安逸の爲に萎靡し意志縱逸は目的に背きて不善に流る。

如來の光明は罪惡を感知し目的に齟齬するより益々煩惱を嫌忌するの感情となる。罪惡の根本は煩惱なり。煩惱の種子潜伏し顯動すれば罪惡となる。

苦 と 惡

苦惱は人生に除くべからざると共に罪惡の根柢なる煩惱は人生にまた斷盡すべからず。煩惱裏に伏し外に惡の誘惑物充滿す。

天然の人には苦惱に對する感情なきも、宗教意識開發せしよりは苦は罪惡の結果なるを識ゆ斯の宗教意識既に開けて自己の罪の報として斯の苦果は逆るべからざるを識る時は苦に對する感情より選つて罪過感情が昂まる。萬劫修行實難續。一時煩惱百千間。また縱使千年受五欲、增長地獄苦() 因、貪瞋十惡相續起、豈是解脱涅槃國。

主我と幸福主義は自ら解脱すべからず。

全く主我幸福は人生の幸福の爲に顛倒して故に苦惱を感ず。人性の眞理を悟り顛倒的幸福主義を脱せば理想に於て惡惱解脱せん。

罪過即煩惱種子は現行と共に自己の力にては解脱すべからず。天然の人は主義の外に眞我あるを發見すること能はず、故に主我を脱する理あらざるなり。

如來の恩寵によつて解脱

主我の世界とは苦と罪惡との性にして之を脱せんには自己の機制我を超えたる眞我

と世界の根柢たる絕對に即ち如來なるを以て是に精神依屬を求むるに非れば解脱望むべからず。機制我は罪惡の伏する處、世界は罪惡の動機充滿して天然の我と世界とに解脱得べき理なし。

機制我と超天然との客體は即ち如來の眞我にして絕對觀念の中に如來の眞を發見す我を如來の眞我に没入したる時に如來の外に我なし、入我々入三密相應す。

妄我を如來の智願海に没入したる所、天地坐斷、東坡が如水投海中、如風中、鼓棗、生滅々盡處、便我與佛同。

相待生滅の世界を超えて絕對不變の如來に歸し機制生死の我を脱して無規の眞我に融合す。

こゝに於て生死の源を断ちて不生不滅の涅槃に入り罪惡煩惱の我を捨てて如來の目的なる大菩提に參與す。

絕對に依屬せるが故に生死を超えて涅槃の地を得たり。眞我の菩提に歸命せるが故に道德の自由即ち自律を觀念す。

投合せし人の心情

感情を宗教の中心とすれば如來の眞我に投合するは恩寵の眞體なりと云ふべし。如來の恩寵によりて解脱する信仰に、自己の罪惡を苦悶し娑婆を厭惡し是れ自己の力と

此の世界の及ばざる處なれば、解脱の感情は益々切にして全心全力を以て我を如來に投歸没入して如來の恩寵を仰ぐを歸命と云ひ、我を厭ひ恩寵を仰ぐの情昇進せし高點より其の信仰の最高潮によりて如來恩寵と投合する處即ち融合なり。

其の心情三昧神祕の状態は言語の及ばざる處、融合神祕の心情は宗教最深の源底宗教生活の活氣は是より生ず。最も深遠にして幽玄。

三昧入我々入三密相應、即ち神人合一の神祕的機能によりて聖靈の子を生ず。

神人交感

楞嚴に定光發明して明性深く入り、如來の氣分と交接して慈光を稟け如來の中に安住す。猶し雙鏡の光明相對するに其中に妙影重々相入するが如し。心光密かに廻して佛の無上の妙淨を獲。心中の發明、淨瑠璃瓶に精金を盛るが如し。心情佛と融合し如來の氣を稟ること、中陰の身自ら父母を求むるが如し。陰信冥運如來の種に入り既に道胎に遊んで親しく覺胤を奉ること胎兒の人相の缺げざるが如し。容貌佛の如く心相同じ。自心合成日々増長し十身靈相一時に具足す。聖靈の形を成し胎を出でて親しく佛子と爲つて法王子と名づく。

神秘融合神人交感によりて覺胤をうく。聖靈交感の心情を譬喩的に證明たるものとす安立は已に融合してよりは情操一變し從來の機制我に非ずして如來真我の中の我として情操真我に安住す。已に生死の關門を越えて高く乾坤を脱出して生死の表に出で高く如來の中に安立する情操は生死の恐るべきなく、八風の爲に動かされず。聖經に佛陀が如來の福音を宣んとするに先ちて如來に融合安立せる心情を表はして爾時世對諸根悅豫姿色清淨光顏巍巍たり。明淨なる鏡の影表裏に暢るが如し。如何なる境遇にも姿色不變、光顏異ることなきは心情の融合し安立したる相なり。

念佛三昧

宗教人格中心 核 永遠生命
 往生……宗一大事……生、永遠生命、
 念佛三昧爲し宗
 生佛感應、如來靈應衆生の靈性に妙感す。
 例す。
 往生淨土爲レ體

眞實心、

生は如來の靈性に感じたる靈我の新生命。永遠不死の生命、即ち成佛の義。
 念佛三昧は生佛感應の妙機神人合體の靈機禪家に見性と云ひ密宗に三密相應と名付け其教に精靈を感ずと云ふ。是例へば植物の春氣に爛漫として麗しきを呈し菝葜として芳を流す時雄藥より發射する處の花粉の精氣が雌藥の子房に受容し、元形質の精子が卵子と合する處に新らしき生命を爲すが如し。
 往生とは如來の靈應を感受する靈的精子が衆生信心の靈卵子と合して靈的胎兒と爲り是れが永遠生命の根元靈的人格の卵子。
 生命即人格の中心核

人格の三階

- 動物性。天然我、皮殼に伏する靈性核、
靈我萌發する時は天然我の皮殼を脱す。
- 天性我
人間性、理性我
推論的、自我生命を認む。
- 靈性我
神人合一性、靈性我
天然我の皮を脱し永遠の生命。
- 眞實我
眞實—如來の靈精を感受したる靈的生命と人核の
虛假—中心生命の核なき果實の皮殼のみの如し。
- 又花粉精子受ざる花、雌雄合體せざる卵子には生命なし。

是心是佛是心作佛

常に如來を憶念すれば其印象深刻なれば自己の神識に常に憶念して止ざれば、自己の神識が如來の聖容を以て心の形容とならん、また常に彌陀中の觀念習修して不斷なれば、自己の觀念彌陀界中にあり、是心佛を作るの因なり、(觀經の疏の)

如來（一）影現無方有緣に赴く。如來は法界身。法界は是所化の境、即ち衆生界、身是能化の身即佛身なり。入衆生心想中とは乃ち衆生念を起して諸佛を見奉らんと願ずれば佛即ち無碍智を以て知り給ふ。依て即ち能く彼想心の中に入て現じ給ふ。但し諸の行者若は想念の中若は夢定中に佛を見る者は即此義を成す。若し心一の相を緣ずるが故に相現す、但し自心に相作すれば即ち心に應じて現す、故に即是三十二相八十隨形好と云ふ。是心作佛と云は心能く佛を思へば想に依て佛身而も現す。即ち是佛なり。此心を離れて外に更に異佛なければなり。作佛とは自ら信心に依て相を緣すること作の如し。

諸佛は圓滿無碍智を以て作意と不作意とを常に能く遍く法界の心を知り給ふ。但能く想を作せば即ち汝が心想よりして現じ給ふこと生ずるに似たりと云こと。

佛を 思想觀念する時は自己の心相と佛と相應し即佛心を形成す、故に 念の佛も佛身なり、故に所念の佛身佛眼現前し、故に形式佛なり。

六 大

六大は色心の二質に歸す。前の五大を色と云ふ。即ち理。理は攝持の義。地水の五大が一切諸法を攝持するなり。

六大は大日如來の理智の二徳なれば、一切萬法みな大日の所成にして、六大無碍なれば、物心二元も差別の方面から見れば分別あり、平等の方面より見れば一如なり。物心不二。一如の實在なり。此の一如の實在が活動的に大日如來を寫象す。

三大は本心の一元にして、一心は絶對本質觀念態が力作能。物理學的に物質の固體液體氣體は、本質の力によりて重力、凝聚力、彈力、附着力、運動力。物體の位置の力、流動體、壓力、液體、空氣力、流動體の浮力、氣體、分子力、熱電氣力の如し。

物質元素化學的元素、其極四大元素は一大元素に歸すとすれば、本質は物心を超えたる一大元素之を物質一大元素、主觀客觀を超越したるものなれども、之を絶對精神

と名づく、佛教に真如如來藏とは是なり。之本體が象相を云は、觀念態なり。絶對觀念なれば意識的ならず。

本體が活動力によりて、

生物の意力、人類の如く高等なる生物の念力は、意識的にして、物質の力とは類すべからざるも、人類の小兒の盲目的意志、また劣等なる生物の盲目的意力、原始の生物は動植分別すること難し、盲動意志より高等に進たる人類の意志として活動する、運動する運動若しくは貯蓄的の力にしても、心理の意力と、物質の力とは、絶對意志の兩方面也。

本質と力とが萬物を造化するに、堅と濕と熱と動とは、力能と本質との關係によりて、出來る體なり。固體液體氣體となるも、絶對精神が能力の象相に外ならず。

三大と六大とは體別なるものにあらず。

三 性

圓性の實體に、全知全能即ち寫象と意志との屬性よりの天則理性の知力によりて、發展產生す。其の發展する勢力は人に發展するが故に、數々の方面に向ふ。内容に無盡の徳を具するが故に、種々の相を呈す。

依他の世界的方面、即ち外面より相待規定の因緣所成の萬法と見る。

勢力が時間的空間的形式に發展す。其の時間空間的形式を見るは相待の世界の方面なり。

天則が理性が萬物を發展する形式理法に理事の二法、普遍と特殊あり。發展の勢力が單純より複雑に向ふ。然れども一理より相待とは、相待ちて離れず。例へば雌雄兩性陰陽兩動の如きは、相待なる異性の中に共通の理法ありて、因緣相待ちて、第二の自己を發展するが如く、天則の則より云はゞ變易に共通の理性たるの勢力ならんも、

相待には雌雄兩性と、如何に勢力にも發展せられて殊となるも、共通の一理の根底たるなり。

第二の相待規定の因縁相關の普遍的理法が勢力によりて外面の因縁の規定は變易の理法によりて、種々に變化し、兩性感應受化の理法によりて、兩性の理法に同化する如くなるも第三の偏執性は一切の生物が特殊の性となる。

第一は絶対無規定、第二は相待規定、普遍共通の理性、第三は相待特殊の個人的性（以下斷絶）

自然界に啓示せられたる靈智態

靈智は本質内容に包含する無量の徳性を開き顯示す。實に甚深玄妙の理を示すことは客觀なる宇宙の現象界を觀ても、彼の宇宙は現實的自明のものならず。其深奥なる本質は玄妙不可思議といふ外なかるべし。かゝる本質内容にいかん理を含蓄してこの宇宙萬有を開示せしものぞ。九天無數の星宿は、其光彩を放ちて燦爛として客觀的靈智の、外面を現はし、恒星は無限の光線を發して、明曜なるは是また客觀的靈智態にして（以下斷絶）

佛性衆生心地

大宇宙全體を一大法身とし、之を如來藏心と曰ひ、亦如來心と云ふ。其の分子たる個人心を、衆生心と爲す。衆生心は小法身として佛性を具す。是大法身の分身として造物主たると共にまた佛と成り得らるべき性を具ふ。故に一切衆生悉有佛性と説き給へり。

衆生心の根底は、是れ佛性なりと爲す。是れ佛陀と成らるべき性能を伏藏す。是れ心地なり。斯の心は土地の一切草木等を生長せしむる能あるが如く、土地は能く荊棘乃至香草稻麥等の、一切の植物を、發生し長養す。いま荒蕪せる地に、種々の雜草繁茂

し、荊棘蔓延するが如きは、是れ土地の穢惡なるに非ず、土地肥沃なるに隨つて、植物繁茂す。如何なる土地も開拓し耕し、好種を播布するにあらざれば、自然に蔓延する草は雜草なり。衆生の心地も亦然り。木一法身の分子たる心地は、佛性を根底と爲すと雖も、開發し修養して、靈性を發動せしめざれば、我見、我慢、我愛等より、我即ち氣儘の性のみ發達して、つひに煩惱の繁くなるは、心地の穢惡なるに非ず根本は靈性なれども、天然、放縱にして只煩惱のみ蔓延す。恰も沃地に雜草荊棘蔓延するが如し。今煩惱雜惡の衆生心地を除きては佛種子を播して、佛果聖道を得べき心地あることなし。實に是れ衆生心は一大法身の分子たる佛性を根底と爲すなり。（以下斷絶）

天佛と人佛

絶対無限永恒の存在を世に宇宙又は天と曰ふ。宇宙の分子たる天的有機を人と名づく。天に天則ありて萬物行はれ、人にまた人爲則ありて行はる。人は自然より生れたるも、進んで自然を開拓して益々自然の秘密をさぐりて自然の妙を現はす。亦自然の中に靈妙を發見すれども自然律を變更することは不可能なり。また人はいかに進化するも自然の本性に具有せる伏能を開展するに過ぎざるべし。天に天則の存することは何人もおそるべし。天地萬法の據つて以て發する處、實に九天無窮の玄源に至つては何人も驚嘆せざることを得ざるべし。

佛教には天地萬物の一大源則にして一切法則の據る處を法身佛とす。是れ天佛なり天真如來なり。

法身ビルシヤナ如來は天則の本源、一切萬法之に則らざるはなし。法身如來は吾人が目撃する自然界の法則たるのみならず、吾人の心靈の對象たる心靈界には、殊に其玄妙不可思議の靈徳を以て統御し給ふものと吾人は信せざるを得ず。

吾人は自然界を通じて、心靈界を窺ふ。

諸の大乗教に明す處の、無量莊嚴の清淨佛刹、七寶莊嚴の淨土、また常寂光明世界

また眞實智慧土、または蓮華藏界等の種々の表號を以て名づける心靈界は、實に不可思議なり。吾人は只理想を以て想像するも實に不可思議なり。靈性に乏しき人等は斯くの如き靈界の妙音を聞かば、忽に疑ふならん。斯くの如き靈界何處にか存在すると。自ら靈なる心眼の開かざるを願みずして、自己の經驗せざる……(以下斷絶)

昭和七年十月十三日 印刷 陸代郵税共
 昭和七年十月十五日 發行 年二圓
 編輯兼 山崎 辨成
 發行人 小石川區關口町六十五番地
 印刷人 小林七太郎
 印刷所 小石川區關口町六十五番地
 印刷所 靜文社印刷所
 電話牛込五四一九番
 東京市小石川區水道端三丁目四十四番地
 ミオヤのひかり社
 振替口座東京六六八五一番